鎮守の森だより

NPO法人社叢学会ニュース

第73号

2015年1月7日

新年にローカリズムの復権を想う

NPO法人社叢学会理事長・京都大学名誉教授

薗　田　　稔

新年明けましておめでとうございます。会員の皆さまにはお元気で正月を祝われておられると拝察いたしますが、どうか年明けて三が日ほどは普段の多忙な日程を忘れて年神の祭、つまり新年という〈時のいのち〉の誕生を祝って頂きたいものです。ひいては、そのことが平素せわしく時間に追われて負い目に疲れがちな身上を拭いさり、改めてさっぱりと出直すチャンスに恵まれることになります。

さて本年は、わが国の行く末にとって大事な年になりそうです。昨年末の衆議院選挙で大勝した安倍政権が、その余勢を駆ってアベノミクスなる経済の成長戦略を掲げ、伸るか反るかの低迷脱却を図るなかで新たに標榜したのが、いわゆる「地方創生」でした。

当面するTPP加入問題など、国際経済の難問山積の上に、国内では東日本太震災をはじめ、頻発する天災人災の救援復興対策に加えて、なによりも全国的に急激な少子高齢化に伴なう人口減少の深刻な事態を迎えた地方社会の衰退や崩壊の危機には、改めて従来の大都市と大企業中心の社会経済のあり方を根本から問い直す国策が求められています。

ふりかえってみると、明治以来の日本の近代化は文明的な成功の陰に、一貫して地域の生活共同体を解体する道をたどることになり、極端な都市化と過疎化のはざまで家族や近隣の絆も喪失して、今や「無縁社会」の病弊さえ問われる時代となってしまいました。

ところが、つい４年前の東日本大震災や20年前の阪神淡路大震災をはじめ近年頻発する災害に際し、あらためて家族や近隣の絆がいかに大切であるかが再認識され、さらにはグローバル化した経済社会の非人間性を打開する方途として、地域や地方の自立がさまざまに模索される時代をも迎えています。いわゆるローカリズム(地方主義)の復権であり、地域社会の再構築という命題です。

たとえば、「地産地消」とかエコ・ミュージアム(地域まるごと博物館)運動とか、太陽光・風力・小水力・バイオなどの発電を共用するエネルギー共同体とか、いずれも巨大企業の経済支配を排して地域社会内での人間的絆による自助的生活社会を復活する試みです。

実は、その点に伝統的なコミュニティ文化としての鎮守の社叢と神事祭礼の活性化が期待されるのです。そのことは、特に今回の東日本大震災の大津波によって壊滅状態に瀕した多くの被災集落にあっても、森や高台に守られて無事だった多くの社寺と、いち早く復活した祭礼芸能がいかに被災民共助の拠り所であったかに明示されています。

地域が真のエコ共同体を維持するには、風土の自然と共生し、神々や祖先の祭をもって人心を一体化するコミュニティ文化が不可欠です。その意味で、日本の文化に根ざした「地方創生」をめざすとすれば、大局的に山と海とのあいだに営まれる人里のエコ共同体を象徴する鎮守の森の意味を再認識して、その保存育成を活動の目標とする、わが社叢学会の使命は明らかでありましょう。

平成２７年度年次総会

5月31日に「森と海の文化」をテーマに宗像大社(福岡県)で

30日(土)には神宝館で“海の正倉院”出土品見学や中津宮参拝も

第63回　関西定例研究会　報告

2014年11月29日
（於　吉田神社～真如堂～金戒光明寺）

京都の社叢の植物（樹木観察）

吉田神社～大元宮～吉田山山頂～紅もゆるの碑～宗忠神社～陽成天皇陵～真如堂～金戒光明寺

案内・解説：渡辺　弘之（社叢学会副理事長・京都大学名誉教授）

今回も渡辺弘之副理事長の案内・解説で京都東山に連なる社叢を歩き、樹木を観察した。

社叢インストラクターセミナーを併催　この日の午前には、吉田神社参集殿で第10回社叢インストラクター養成セミナーが開催され、第1講では井上満郎副理事長が、社叢（神社）と人の生活の関わりについて、『日本書紀』や『万葉集』などの史料をひきながら、古来、社叢（神社）は人々に暮らしに濃厚にかかわってきたことを解説。受講生は、日頃見ることのない漢文の史料の解読に苦労しつつも、日本人と社叢（神社）の長く深いつながりを学んだ。

井上満郎副理事長の講義

２講目は渡辺副理事長が、森と社叢の違いについて、森の定義や神社の森（鎮守の森）と寺院の森の違い、森林の生態などについて説明した。また、午後からの樹木観察の見どころについても解説、午後からの樹木観察では、20種の植物の同定することが課題として出された。

樹木観察：吉田神社～吉田山～陽成天皇陵　午後からの関西定例研究会には、関東や北陸など遠来の参加者もあり、紅葉の名所が連なる東山の神社仏閣を巡った。吉田神社境内を出発し、早速、関東には珍しいというネジキを観察、エノキとケヤキの葉の見分け方などを学びながら全延喜式内社の天神地祇八百万神を祀る斎場所大元宮（さいじょうしょだいげんぐう）に向かった。

いざ、出発！（吉田神社）

八角形の本殿に六角の後房を付けた、極めて特異な形状で、重要文化財に指定されている大元宮本殿を参拝し、境内のマツについて説明を受けた。ここから吉田山山頂近くの「紅もゆるの碑」間での行程で観察したのは、常緑樹ではナナミノキ、タラヨウ、アラカシ、ウバメガシ、サカキ、落葉樹のエノキ、ケヤキ、ムクノキ、ネジキなどで、それぞれ渡辺副理事長が特徴や性質について説明した。

この後、宗像神社でオガタマノキ、紅葉見物で賑わう真如堂では、カエデと競うように紅葉が美しいハナノキを観察、シナボダイジュ（ボダイジュ）は、苞葉の真ん中の茎の先につく種子が多く観察されたが、渡辺副理事長が、これだけの種子があるにもかかわらず、実生がみとめられないことを指摘、外来種はいかに古くから定着していても、発芽し難いことを説明した。さらに、茶色の風船のような果皮に包まれた種子を多くつけたオオモクゲンジと、果実が一回り小さいモクゲンジを観察した。

質問をしたり、メモを取ったり、熱心に観察をする参加者

この後、真如堂吉祥院で一休みさせていただき、社叢インストラクター養成セミナー受講者が、20種の同定に挑戦、それぞれ、枝葉の特徴を説明しながら植物名を発表した。

幕末に会津本陣が置かれた金戒光明寺では、円筒形に仕立てられた樹高が６ｍ近くにも及ぶシマモクセイに圧倒された。さらに、長々と続くツル植物のオオイタビは、果実が台湾で愛玉子という寒天状のデザートの原料として利用されているカンテンイタビと同種であ

次回予告【第64回関西定例研究会】

◆日　　時：2015年1月24日(土)　13:30～15:30
◆場　　所：コープイン京都（中京区柳馬場蛸薬師上ル井筒町411 TEL：075-256-6600）
◆テ ー マ：甦る桜の園　～向日神社の鎮守の森～
◆講　　師：上 田 昌 弘（社叢学会理事・鎮守の森の会会長）
◆ｺﾒﾝﾃｰﾀ：糸 谷 正 俊（社叢学会副理事長）

セミナー受講者が20種の植物を同定し発表（左）
巨大なシマモクセイ（下）

オオイタビを観察（下）

ることから、オオイタビで愛玉子づくりに挑んだ渡辺副理事長のエピソードなどを聞いた。

半日をかけて巡った京都東山に連なる社叢の植物の豊かさを改めて実感し、参加者からも、これほど多くの植物を、懇切丁寧な解説付きで観察する機会は、他にはないと高い評価を得た。

関西定例研究会に参加して

瀧澤　樹理

先日、社叢インストラクターのセミナーに参加し、午後からその流れに合わせて、関西定例会（樹木観察：吉田神社～岡崎神社）に参加させて頂きました。

普段、私は東京を拠点としていますので、関西には年次総会などの特別なイベントの時だけと訪問する機会が限られています。

その数少ない京都での訪問を重ね、境内を観察していますと、関東と関西では境内から受ける印象の違いを感じることが多くなりました。

私が感じる関東と関西の神社境内に対する違いは、神社と人との距離感、また人が持つ神社に対する関心の深さにあるように感じます。

関西は由緒ある神社が関東に比べ多くあること、世間の持っている意識が京都という土地と寺社の深い繋がりが定着していること、住人にとって神社が常に身近に在る事が関心意識の高さにも反映されて、本来在るべき社叢の姿を残しやすいのでないかと感じています。

関東の意識が全くない訳ではありませんが、神社の身近さの違いの差を日頃の出会う人との会話でよく感じます。その差が、境内の保全意識に関わっているように感じるのです。

私が考える本来在るべき社叢の姿とは、自然の中に在る理が人の心に元々備わる内なる静寂さに共鳴を与える存在だと考えています。

また、他人からの強制がなくても自然と根付く信仰が、そこには在ることだとも考えています。

神社は御社殿だけでは成り得ません。神社は境内そのもの、森そのものであり、そこに訪れる人の魂に触れる佇まいがあります。

自然の中に在る理が、人の心に元々備わる内なる静寂さに共鳴するならば、また森を守っていくことが神社の始まりだとしたら、もっと誰にでも身近な存在であり続けるのだと考えます。

現代社会というのは、すべての意識が外側へと向かうように仕組まれているように思えてなりません。社会での自分の立ち位置に注意が向けられ、内面で心地よく感じることが如何に大切かということを忘れているようにも思います。そうならないためにも、人の内なる静寂さに共鳴する社叢の存在が、その架け橋となり、人の魂に触れ静寂さを保つことに繋がっていくと思うのです。

関西に身を置きましても、関東に身を置きましても、私が切に願う思いです。

社叢の保全や復元のための樹木管理（植栽・伐採・剪定など）を遂行させる専門技術がまだ足りないと思っております。

今後は、幽邃森厳な社叢がひとつでも多く後世に残す手助けを技術者としての技量を高めていく所存ですので、宜しくお願い致します。

次回予告【第63回関東定例研究会】

◆日　　時：2015年2月23日(日)　13:30～16:30
◆場　　所：國學院大學渋谷キャンパス120周年記念1号館4階1405教室
◆テ ー マ：「鎮守の森コミュニティー構想」の現状
◆講　　師：宮下佳廣（(一財)鎮守の森コミュニティ推進協議会代表理事）

事務局から

● 謹んで新春のお慶びを申し上げますとともに、会員の皆さま方のご健勝をお祈り申し上げます。
　昨年は、「地球くん、怒ってる？」と尋ねたくなるような、大きな自然災害が続いた年でした。母なる大地の堪忍袋も限界なのでしょうか。
　古来、日本人が守り続けてきた社叢も大きな危機の前にあるように思えます。我々の世代で、美しい社叢を滅ぼすことはできません。社叢学会の活動が問われる時期に来ていると存じます。今後とも美しい社叢の維持管理に力を尽くしてまいります。何卒よろしく学会活動にご協力賜りますようお願い申し上げます。

● 年次総会は別記のとおりです。例年通り研究発表者を募集しております。奮ってご応募下さい。宗像大社は玄界灘を望む辺津宮、大島に鎮座する中津宮、海を60kmを隔たった沖ノ島の沖津宮の三宮の総称です。普段は殆んど渡島が許されない沖ノ島は海の正倉院とも称され、出土品は神宝館に展示されています。今回、社叢インストラクターなどに限られますが、沖津宮の参拝も実現いたします。ぜひご参加ください。

● 第10回社叢インストラクター養成セミナーの2日目(1/17)は枚岡神社で開催いたします。植生調査の意味やそこからわかることを学んだ後、植生調査実習を行います。この日だけの参加も可能です。ぜひ、ご参加下さい。

編集後記

　まずは「第10回社叢インストラクター養成セミナー」報告番外編をイッパツ！　会場の吉田神社は渡辺副理事長母校の京都大学のトナリというか、上というか。で、お昼ご飯は学食という概念からは程遠いカフェテラスへ。土曜日とあって(普段も、かも知れないけれど)、学生というには少々お年を召した家族連れやらグループで賑わっております。で、学生とは言い難いお年頃の我々も、名物「総長カレー」756円也をいただく(中には京大ビールをお供にしたヒトも！)。残念ながら鹿肉カレーはなかったけれど、なかなかスパイシィで、さらりとした味わい。美味しゅうございました。で、今回も写真つきで。。。

　なにしろ、関東例会の開催日が遅かったもんで、たまってた報告もなかったもんで、3・4面が全面関西定例研究会報告ってことになって、大変なのよ、紙面を埋めるのが！　　(藤岡　郁)

社叢インストラクター資格認定試験

2/22(日)に京都で　出願締め切りは1月30日(金)

出願用紙はホームページ(http://www.shasou.org/inst/gan.pdf)に

研究発表者募集！

テーマ：社叢に関する理論的研究
　　社叢の保存･拡充に関する実践的調査研究
発表時間：20分（報告15分+討論5分）
応募締切：2015年3月末日必着
応募要領：住所･氏名を明記の上、発表内容を300～400字にまとめ、E-Mail、FAX、郵便で本部事務局に送付

＊ 応募者多数の場合は担当理事で協議し、4月中旬までに諾否をお知らせいたします。
＊ 発表者は、発表当日に配布する資料を4月末までに本部事務局にお送り下さい。

発行人　社叢学会事務局　〒604-8115 京都市中京区雁金町373番地みよいビル303号
TEL 075-212-2973　FAX 075-212-2916
URL http://www.shasou.org　E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
facebook https://www.facebook.com/shasou
社叢学会関東支部　〒368-0041　秩父市番場町1－1　秩父神社社務所内
TEL080-1514-5032　E-Mail shasougakkai@hotmail.com